

元暁大師の十念義について

鄭 学 権

新羅における元暁大師（六一七～六八六）の特色は、或る一經や一論の教義のみを、その所依とすることなく、大乘・小乘・法性・法相等、その他の様々な対立矛盾する諸種の教義を和合させ、一味の仏法に帰結せしめることを、その主旨としている。したがって元暁大師の根本思想は「和諍思想」である。

しかしながら、大衆仏教をひろめるに当っては、弥陀浄土往生思想を鼓吹することにつとめ、身を以て念仏行を示すと共に、その尨大な著書の中には、約十種の浄土思想に関する著述があり、その中の『無量寿経宗要』一卷、『阿弥陀経疏』一卷、『遊心安楽道』一卷が現存している。これらの著述により、その弥陀浄土思想の全般について論ずることは、しばらく措き、今は、ここにその十念往生義について論じて見たい。

十念往生義とは、『無量寿経』の第十八願に、「我が国に生まれようとする者は、乃至十念をしても往生することができ」とし、また、『観無量寿経』に、「下品下生のものが五逆

十悪を犯したとしても、臨終に当って『帰依無量寿仏』を心に称えて十念を具足すれば命が終つて極楽浄土に往生するを得る」としているところの、その十念であるが、十念についての説明が明らかにされていなければならないために、後世の各疏釈家は種々の解釈を生ずるようになり、元暁大師以前における『観無量寿経』と『無量寿経』の十念に関する各疏家の解釈を見れば、先ず

東晋の廬山慧遠は、『無量寿経義疏』下輩の往生について、「一は菩提心を発し、二は専ら彼の無量寿仏を念じ、乃至十念にして彼の国に生れるを願うべきであり……また下品下生の人も十念を成就すれば往生することができる」とし、静影寺慧遠も、その『観無量寿経疏』に、同じく、「下品下生の者が四重・五逆の罪を犯しても……至心をもつて無量寿仏を称え十念に至れば罪が滅して往生することができる」とし、また、天台大師智顛の『観無量寿経疏』や、吉藏の『無量寿経義疏』にも、「十念を修め成就すれば即ち往生を得る」として

いるが、十念の内容については説いていない。

次に唐の曇鸞は、『観経願往生偈』に、「百一の生滅を一刹那とし、六十刹那を一念とするが、この中には、この時節を取らず、但阿弥佉仏の総相と別相を憶念し観する縁に随つて心に他の想なく十念が相続するを十念とする」とし、その後の道綽も、その義を継承しており、善導は『観無量寿経疏』において、念とは声であると理解し、一念、即ち一声、十念即ち十声であるから、十回の口称念仏することを十念としている。このような道綽や善導等が主張する口称念仏に対して、異たる十念の義を唱えているのが元暁大師の十念説である。

即ち元暁大師は下輩の十念について、顯了の十念と隱密の十念との二義に分けて説明しているのが注目される。先ず、上・中・下三輩の往生因を各々に正因と助因とに分け、正因は発菩提心とし、助因は念仏・持戒・修斎・修功德等であるとし、また、下輩についても『無量寿経』の下輩の文に、乃至十念を専ら彼仏を念ず」とあるのは、不定種性の人を指すものであり、また「乃至一念を彼仏を念ず」とは菩薩種性の人の場合であると区別して説明している。

又、元暁大師は、『無量寿経宗要』において、「この経は浄土の因果を以てその宗体とし、その浄土の因果を因行と果徳とに分け、果徳の浄・不浄については四つの相對を以てその階級を甄わすが、その中の第三対は歡喜地以上の所居土であ

り、第四対は二乘頂位と菩薩初發心住以上の所居土であるけれども、第三対の浄土は第四対の浄土よりその位が高いので、元暁大師は隱密の十念を第三対浄土の下輩の因とし、顯了の十念を第四対浄土の下輩の因としている。このように隱密の十念は顯了の十念より行い難きもので、このうちの隱密の十念としては、『弥勒発問経』に「一切衆生において慈心、悲心等を起すという十念を挙げて、この十の事を間断なく念ずれば、浄土に往生するを得るとし、「この十念は凡夫ではなく、初地以上の菩薩が乃ち能く十念を具足し、これを純浄土において下輩となす。これが即ち隱密義の十念である」としている。

また、顯了義の十念とは、『観無量寿経』に、「下品下生の者は、或る衆生が不善の業を犯して五述十惡の不善を具うといえども、臨終において善知識に遇い、為に妙法を説き教えて念仏せしめ、若し念ずる能わざるものは応に南無量寿仏と称え、このように至心に声を絶やさず十念を具足すれば、仏名を称えたるがために念念の中に八十億劫の生死の罪を除き、命が終つた後には即ち往生するを得る」としている。また、元暁大師は『観無量寿経』は顯了の十念であり、『無量寿経』は顯了と隱密の十念の両方に通じているとしている。これが元暁大師の十念説である。

元暁の撰述である『遊心安樂道』に、その第四往生因縁門

の中において隠密十念を論じており、そこには『弥勒発問経』所説の十念と共に『大宝積経発勝志樂会』所説の十念が列挙しているが、この二つの十念は大同小異であり、『発覚浄心経』所説の十念も、この本が『大宝積経発勝志樂会』と同本異訳であるから当然に同じである。しかしながら菩提流志がこの『大宝積経発勝志樂会』を訳したのは元暁大師の入寂後二十年頃に当る唐中宗神竜二年即ち西歴七〇六年であるのに、これがすでに引用されている『遊心安樂道』は元暁大師の撰述と見做しがたいとの説が出されているが、その全篇の内容を検討するに、その主旨は元暁大師の『無量寿経宗要』や『阿弥陀疏』と一致しており、又、その文章も元暁大師の手法と同じであるから、これは、もともと元暁大師が隋代の闍那崛多訳である『発覚浄身心経』の文を引用していたのを後人が後に訳された『発勝志樂会』の文と入れ換えたのではないかと見るべきであらう。又、『遊心安樂道』の末尾に菩提流支訳の『不空羅索神變真言経』第二八巻の「灌頂真言成就品」が引証されているのも同じような理由で後人の改竄ではないかと見られている。

以上の如く、元暁大師の十念義を考察して来たが、曾つて望月信享博士は『中国浄土教理史』において元暁の十念説を論じている中で、十念相統の説に渡河の譬喩を引いているのは、これが曇鸞の『略論安樂浄土義』に載せられている喩説

であるからして曇鸞の論旨も受け入れていたのであらうと見
ておられるが、しかしその隠密と顯了の十念の二義は独創的
なものであると評価されており、近来においては源弘之氏が
隠密十念説は元暁の独自の十念説であり、その端緒は迦才
の『浄土論』にある第四出道理の条に「弥勒所問経に説く十
念中に云く云」より発したものであらうと論じている。また
覚岸男氏は、元暁大師が臨終の十念を重視するところは、唐
の善導大師が「上は一形を尽し、下は十念に至り皆往生せざ
るなし」と強調している点と思想が稍似ていることを論じて
いるが、恵谷隆戒博士もあきらかにされているように、韓国
浄土教の特性として十念等の諸問題が『無量寿経』と『阿弥
陀経』を中心に論ぜられていること、四十八願を細分類しそ
の一々に独自の題名呼称をつけていること、第十八、十九、
二十三願を特に重視すること、また、十念は『弥勒発問経』
に説く慈等の十念を重視すること、臨終に十念を具足するこ
とを往生の必須条件として、十念の中、一念でも欠けたら往
生することはできないとしているが、後に日本浄土教にも大
きく影響したこのような韓国浄土教における十念尊重思想の
形成に中心的役割を果たしたのが元暁大師の十念義であつたと
いえるであらう。